

# Somali Refugees

[ソマリア難民]

写真・文＝渋谷 敦志 (フォトジャーナリスト)

生と死のはざままで

重度の栄養失調が原因でモガディシュ市内の病院に入院するアブドルジュールちゃん(3カ月)と、母親のファルトウン・フセインさん(22歳)



モガディシュ市内に広がる国内避難民キャンプ。荒廃した国会の近くにできたこのセイカ避難民キャンプにはおよそ500世帯が暮らす



モガディシュの避難民キャンプに着いたばかりの女性が枝木を組んで仮設の住居を建てている

アフリカ北東部の一帯、「アフリカの角」に位置するソマリアは、20年に及ぶ紛争の影響で今も無政府状態が続く。そこに過去60年で最悪といわれる干ばつが襲い、南部を中心とした地域で食料危機が深刻化している。

これを受けて国連は、今年8月までに首都モガディシュを含む5つの地域で飢饉の発生を宣言。「1日の栄養摂取が2100キロカロリー未満」「5歳未満児の30%以上が中程度以上の栄養失調」「1日の死亡者が1万人に2人以上」といった国連による飢饉の定義に照らし合わせるよと、その影響はソマリア人口のおよ

そ半分、実に400万人に及ぶとされる。また、そのうち75万人は深刻な飢餓状態にあり、多くの乳幼児が栄養不良による下痢症や肺炎、感染症で、今この瞬間も生死の境にいる。

しかし、南部地域の大部分はイスラム武装勢力アル・シャバブの勢力下であり、国連機関でさえ思うような救援活動ができていないのが現状だ。そのため、食料と安全を求めて隣国のケニアやエチオピアなどに逃れた難民は92万人にも上り、約140万人が国内での避難生活を余儀なくされている。

その国内避難民が集中する首都モガディシュに、今年9月入った。

地球ギャラリー vol.39

- a. 嘔吐を繰り返すイブラヒムちゃん(6カ月)を抱くハリム・アフメッドさん(35歳)。南部のバイドアからモガディシュに逃れてきたばかり
- b. 栄養状態のスクリーニング作業。体重と身長、上腕周囲径を測り、重度の栄養失調児を探し出す
- c. 6歳のハッサン君は自力で歩いたり食事したりできないほどやせ衰えていた



a



c



b



かつてモガディシウ市内で最も活気があったバカラ市場付近。戦闘で荒廃したが、少しずつ市民生活が戻りつつある

8月にアル・シャバブが撤退したモガディシウでは、休業していたレストランや自動車部品の店などが再開。物があふれている市場では女性たちが買い物に夢中になり、路上ではサツカーを楽しむ子どもたちの姿があった。一見、やっと訪れた平穏な日常を謳歌しているように思えたが、路上の雑踏に眼を凝らすと、空の鍋やバケツを抱えて必死に歩いている人々に気付く。食料配給に向かう国内避難民たちで、その多くが女性や子どもだった。

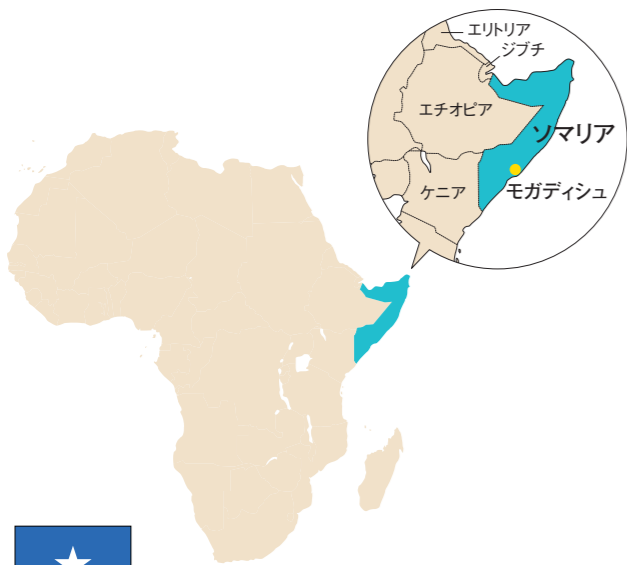
モガディシウ市内には、枝と布で張り合わせただけのドーム型テントがびっしりと並ぶ広大な避難民キャンプや、廃虚や空き地にできた小さな避難所があちらこちらにある。その一つ、75世帯が身を寄せるホダン地区の避難民キャンプに到着したばかりだというハリム・アフメッドさん(35歳)は、「家畜のヤギなどが全滅し食料も尽きた。子どもだけでも救いたいと思って、夫を村に残して逃げてきた」と話す。生後6カ月の息子イブラヒムちゃんは嘔吐と下痢を繰り返し、その腫は涙であふれていた。だが、声を上げて泣くほどの体力は残っていない。ハリムさんは幼子の目や鼻にたかるハエを追い払いなが



ら途方に暮れるしかなかった。避難の旅路にはいくつもの検問所があり、緊張と疲労が伴う。中には途中で命を落とす人もいる。無事キャンプまでたどり着いたとしても、乳幼児はひどく衰弱していることが多い。それでも彼らには、長い道のりを

歩き、避難できるだけの食料や体力があったといえる。避難することもできずに、母親の腕の中で静かに死にゆく子どもたちがいることを思うと、その夜明けの遠さに暗澹たる気持ちになって胸が苦しい。

地球ギャラリー vol.39



首都：モガディシウ  
 面積：63.8万km<sup>2</sup>(日本の約1.8倍)  
 人口：895万人(2008年)  
 公用語：ソマリ語、アラビア語  
 宗教：イスラム教  
 通貨：ソマリア・シリング(SOS)  
 1SOS=0.047円(2011年11月現在)  
 気候：年間を通して暑く、降雨は不規則で乾燥している。

(注)1991年に内戦状態に入り、2005年には暫定連邦政府(TFG)が樹立されたものの、ソマリア全土を実効的に統治できておらず、日本はTFGを政府承認していない。



炊き出しの食料を受け取った避難民の少女。周りではモガディシウの小学生が普段通りの授業を受けていた



南西部ディンソールから6日間かけて6人の子どもとモガディシウに逃れてきた女性



d

d.戦闘で壊れたモスクで勉強する子どもたち  
 e.小学校の校庭内で、地元NGOによる炊き出しに並ぶ避難民の女性たち

e



[上]ダダブ難民キャンプのホストコミュニティでも水不足が深刻。枯れていない井戸には住民が集中する  
[下]井戸を建設するため、掘削機で地中の水源まで穴を掘っていく

# 難民キャンプへの緊急支援と 干ばつに強い地域づくり

60年ぶりともいわれる大干ばつに見舞われているのが、ソマリアやケニア、エチオピアなど「アフリカの角」と呼ばれる地域。JICAはソマリア難民が押し寄せるキャンプと、その周辺地域に支援を行っている。



緊急援助物資の一つとして、ケニアとエチオピアの難民キャンプに日本から送られたテント

ソマリア、エチオピア、ケニアなどをはじめとする「アフリカの角」地域では、60年ぶりといわれる干ばつ被害が深刻化している。地域全域で食料援助が必要な人は約1,300万人で、中でもソマリアでは最も被害が大きいといわれている。しかしソマリアは、約20年間無政府状態が続き治安が不安定で、被害状況を把握することすら難しい故に、援助機関が活動できる地域も限られ、暫定政府の勢力が及ぶモガディシュ周辺以外には支援がほとんど行き届いていない。そのため、もともとソマリアの人々は紛争により「難民」となって国境を越え近隣諸国に流入していたが、この干ばつの影響を受け、さらにその数が急増している。難民の子どもたちは栄養失調に加え、感染症の予防接種をしていない場合が多いため、難民キャンプの衛生状態が悪ければ命にかかわることもある。

現在、ソマリア難民の数は、ケニアのダダブ難民キャンプに約44万人、エチオピアのドロアド難民キャンプに約20万人とされるが、各難民キャンプでは収容能力を超え、テントなどの物資が大幅に不足している状況だ。そこでJICAは、難民キャンプへの緊急

支援とともに、今後の干ばつに対処していくための中長期的な支援も行っている。

緊急支援では、ケニアのダダブ難民キャンプに対して、5,000万円相当の物資（テントや毛布、スリーピングマット、ポリタンクなど）を、エチオピアのドロアド難民キャンプには、4,000万円相当の物資（テントや発電機など）を供与。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）を通じ、両キャンプで配布した。

また、難民キャンプ周辺のコミュニティへの支援も展開。緊急性の高い難民キャンプの問題には国際社会の支援が集まりやすく、給水施設や学校、病院などの基礎的なインフラが整備されていくが、同様の干ばつ被害を受けながら、難民キャンプ周辺地域に住む「ホストコミュニティ」の人々には支援がほとんどなく格差が生まれてしまうことがあるからだ。そこでJICAは、ダダブ難民キャンプのホストコミュニティで、ニーズが最も高かった給水事業を行うべく、「ソマリア難民キャンプホストコミュニティの水・衛生改善プロジェクト」を2010年に開始。キャンプの周辺地域に11本の井戸、3カ所のため池を建設しているほか、そこから離れて

暮らす人たちにも水を送るために給水車を供与しており、さらに井戸の増設や修復の追加も検討している。難民キャンプとその周辺地域に不公平感が生まれにくいよう、支援のバランスをとることが重要なのだ。

一方、中長期的な支援として、干ばつに強いコミュニティづくりも行っている。「アフリカの角」地域はもともと降水量の少ない乾燥・半乾燥地が大半で、干ばつや食料危機が発生しやすい地域だからだ。その一つの例が、ケニアでの「第二次地方給水計画プロジェクト」。南部地域の50カ所に井戸を建設するほか、住民参加型で給水施設の運営・維持管理ができるようにし、干ばつ時でも水を安定的に確保できることを目指す。

さらに、ケニア北部地域の農牧畜民に対する支援も検討されている。農作業がない時期にはチーズを作るなどして現金の副収入源を持てるようにすることで、干ばつに対する「抵抗力」を持つコミュニティにしていこうためだ。

また、ケニア同様エチオピアでも、給水改善や農業支援など次の干ばつを見据えた支援を検討している。



[左]エチオピアのドロアド難民キャンプには今年になって約8万人が新たにソマリアから流入している  
[右]JICAエチオピア事務所の二見伸一郎次長からUNHCRエチオピア事務所のマグダ・メディナ氏に緊急援助物資が引き渡された